こんな本
あんな本

「ちいさいモモちゃん」
「モモちゃんとプー」
松谷 みよ子著・講談社

村石 京子

今月は、とてもかわいい童話をご紹介します。でも、ご紹介などといっても、もうお読みになった方もいらっしゃるでしょう。なぜなら、この「ちいさいモモちゃん」は、一九六四年に第一刷が発行されてから、今までに二十三刷まで版を重ねてきました。その間に、どんなにか大勢の人たちに読まれ、親しまれてきたかということがわかります。なかでも、小学生の人たちがとても喜んで読みました。けれど小学生ばかりでなく、おとなが読んでも楽しい童話なのです。皆さんの中にも、もうきっとモモちゃんをかわいがって下さった方たちがいらっしゃることでしょう。その「ちいさいモモちゃん」についで、今度「モモちゃんとプー」という続編が出ました。

この本をここにとりあげたわけについて、少し書いてみたいと思います。私は小さいころから本を読むことが好きでしたし、大きくなったら、童話を書くか、絵本を作る仕事をしたいと思ったこともありました。学校を卒業して、幼児の教育を志すようになったころも、よい本、よい童話を作って子どもたちにあげたいと考えていました。いっしょに同じ道に進んだ人で、絵のじょうずな友だちがいて、二人でよく話しました。私が童話を書いて、彼女がさし絵を書き、二人で本当に子どもに喜ばれる素晴らしい本を作りましょう。こうした夢をもちながらも、なかなか現実の道は遠く、実現し得ずに年月がたってしまいましたが、そんなある日、この「ちいさいモモちゃん」にあったのです。私はこういう童話が書きたかった、それが目前にあったという思いがしました。

そのころは、まだモモちゃんは生まれて間もなくで、ママがお仕事の間は「あかちゃんのうち」へ行っていたり、「ほいくえん」で友だちとあそんでいたりしました。そしてだんだんとモモちゃんも大きくなりました。五つになったモモちゃんのところには、妹のアカネちゃんが誕生しました。そしてモモちゃんもうじき学校です。また、モモちゃんが赤ちゃんのときから仲良しだったしっぽぱたぱたのじょうずなプーという黒猫は、およめさんをもらうことになったのです。それが続編の「モモちゃんとプー」のお話なのです。

私の本だなにずっと以前から立っている「ちいさいモモちゃん」の隣に今度「モモちゃんとプー」が並びました。それがうれしくて、ここにとりあげた次第なのです。ちいさかったモモちゃんも随分成長しました。まだ三つ位のモモちゃんしかご存じでない方は、大きくなってお姉さんになった姿を是非みてください。

児童文学の各賞を受賞した松谷みよ子さんのいろいろな作品は、幼児から小学校の上級学年まで、広い層に親しまれ、読まれ続けていますが、私のようなおとなの愛読者もきっと多いでしょう。童話だからといって、幼児に読んできかせようとすぐかまえてしまわないで、自分で読んで楽しく味わっていたい感じです。

もちろん、この童話の中には幼児の心というものが、実に立派に描かれています。一人の主人公をとおして、幼児の心理と行動というものが、ある面ではリアリスティックに、またある面ではファンタジィックに、明るく物語られています。

しかしそれだからといって、幼児教育に直接役立つことを、とばかり考えて読むよりも、もっとゆとりをもって読む方が楽しいと思います。作品をとおして感じられる暖かさ、ふくよかさなどによって、読む人の胸のうちがほのぼのとしてくることでしょう。この何か春の光のような味わいというものは、どこから生まれているのでしょうか。私には、作者の心の中の、本当に子どもを愛し、いつくしむ力が源となって文章ににじみ出ているのだと思われます。

これからも新しいよい作品を生み出し、活躍して下さるようにと願い、そして私もまた、いつの日にかこんな童話を書いてみたいと思いながら、この項を結びます。